

## 雑誌『建築世界』の創刊期における「主張」欄の推移と編集体制の特徴について 建築世界社の出版活動研究 2

On Characteristics of Prefatory Notes "Shucho" and Editorial Board of the Architectural Magazine  
KENCHIKU-SEKAI in its Founding Period; Studies on Architectural Publisher Kenchiku-Sekai-Sha, 2

○川嶋勝<sup>1</sup>, 大川三雄<sup>2</sup>, 矢代眞己<sup>1</sup>, 田所辰之助<sup>2</sup>

\*Masaru Kawashima<sup>1</sup>, Mitsuo Ohkawa<sup>2</sup>, Masaki Yashiro<sup>1</sup>, Shinnosuke Tadokoro<sup>2</sup>

### 1. はじめに

宮内嘉久は、日本初の建築誌が造家学会の機関誌『建築雑誌』(1887～、現日本建築学会)であることを「ジャーナリズムのアカデミーへの屈従的性格」の「前史的な形成を受け」たと論じた<sup>1)</sup>。しかし、建築誌として最初の商業誌である『建築世界』(1907～44)には、前稿でみたように、創刊まもなく辰野金吾ら学界の重鎮が寄稿し、建築批評の萌芽も認められた。本稿では、そうした同誌の創刊期の展開について、編集局の「主張」欄の推移と編集体制の特徴を中心に考察する。

### 2. 建築家たちの祝辞

河東義之が「真の意味での創刊号」<sup>2)</sup>と位置づけた『建築世界』1909年7月の2周年「記念号」には、妻木頼黄が「今や斯界ニ一光彩ヲ放テル参考資料ナリ」と祝辞を寄せている。その前年、1908年から有力建築家の署名記事が現れたことを前稿で指摘したが、同年7月の創刊1周年「記念号」には、賀詞の出稿が見開きで並び、古市公威、辰野金吾、曾禰達蔵、伊東忠太といった建築・土木界の権威が名を連ねている。

次頁には妻木の祝辞が1頁大で掲げられ(図1)、編集局の「記念号発刊の辞」を演出するように対向で掲載された。「日猶ほ浅しと雖も斯界の賞賛を博せしは蓋し時宜に適ひ実用に適せる」までに至らせた発行人「光岡君」の事業手腕が讃えられている。

つまり、創刊翌年には学界の支援が広く集まっていたことを指摘できる。同誌のパトロンについては、三橋四郎の存在が従来から知られており<sup>3)</sup>、実際に裏表紙への出稿が1908年5月号から毎号つづくことから、その後援が裏づけられる。また、祝辞の扱いからは、妻木が第一の顧問と遇されていたと考えられる。

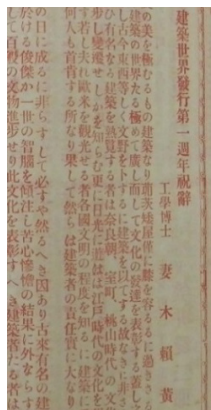


図1 妻木頼黄の創刊1周年祝辞

### 3. 「主張」欄の推移

編集局の巻頭言が2周年記念号で「主張」欄と定まったころに、建築批評の萌芽が見出せることを前稿で述べた。その様相を具体的にたどっていくと、同号では「土木建築思想の乱上」と「各様式乱れ」る「社会の状態に鑑み」て、「国民の土木建築上の於ける必要の知識を普及」すべく「発刊の企て」がつづられた。翌1910年8月号「方針を誤れる我建築界」では、様式論争による「建築改良とは甚だ遠い心持ち」が示され、「新材料の上に発達を求むる方が有効」と唱えた。「言ふ迄もなく鉄とセメント」であり、「世界的大様式は必ずや世界的材料あつて始めて成立す可きもの」とし、日本が「世界建築界に雄飛せんとする矢先に此新材料の現はれた」のは「千載の一遇」としながら、「何故に我建築界は構造上に重きを置かない乎」と嘆く。

あくる1911年2月号「建築と批評及建築家と批評家」では、建築家が「技能を研くに二つの途」として自己研鑽と「他人の意見を聴く」ことを挙げる。「批評といふことが表だつて聴ゆるのは漸く二三年此方」であり、建築が「我国の芸術中に重く見らるゝに至つた」のは「我建築界の慶事」とする。「併し乍ら此批評」が「社会の耳目を聳動さするに到つた限りは其反共として正しき批評は良好なる結果を持来たすと同時に誤られたる批評は好しからざる結果を起す」注意を喚起し、「批評は建築家の健康剤」であり「或は却て害毒の基」となる功過が指摘された。さらに「全く此種の専門知識に欠けたる一般社会」の目にも批評が触れるゆえに「正鵠を欠いた」ならば「其結果は間接に建築家を毒することが意外に甚しい」ことが警告された。

以上、創刊期の「主張」欄の推移をたどると、3年目に議事堂の様式論争をめぐる建築界の混乱を嘆き、翌年に新材料の鉄筋コンクリート造による様式の創造を訴え、5年目には建築批評の功過を指摘していた。そこには編集局の批評精神の急速な形成が認められ、建築に対する「社会の耳目」への意識が通底している。

1: 日大短大・教員・建築 2: 日大理工・教員・建築

#### 4. 「編集局記者」の形跡

『建築世界』の創刊経緯と発行人・光岡義一については「創刊時に東京高等工業学校に在学中」だった 10 年来の匿名寄稿者の回顧を河東がたどっている<sup>4)</sup>。江戸以来の大店・須原屋書店が「駒杵氏の住宅建築学」<sup>5)</sup>で儲けたのをみた光岡が「日露戦役に際して得たる賞金の百金」を元手に建築誌の発刊を須原屋にもちかけた。光岡は建築の「全くの素人」であり、「専門の方では I 氏」と奥付に編集者と記された小西勝次郎の 2 人で「兎に角記事を纏めて第一号を出した」。I 氏は不明とされ、小西は「小西可東」の筆名で同誌に執筆したことを河東が指摘したほかは知られていない。

奥付の編集名義は 1909 年 8 月号から光岡が発行兼編集人となり、小西の名が消えた。この年の年賀社告では「編集局記者」の名が列挙され、記事の署名をたどると建築・土木技師が多いことが判明した(表 1)。前述の匿名寄稿者は「戸台邀月」と類推しようが、出身校が一致しない。小西は他社の著書をたどると(表 2)、建築を専門としないジャーナリストとみられ、戦記ものの出版で光岡や須原屋との関係も推測しうる。

つまり同誌の創刊期の編集は、一般のジャーナリストの小西が実務を担い、技師たちが記者として共同していたと考えられる。その体制が深まったために、奥付の編集名義に小西の名が消えたとも考えられる。

#### 5. 記者のみた建築家の人間像

2 周年記念号には小西の「記念号発行当日の感」が「茶話」欄に異例の 3 頁で組まれている。同号の取材で「大家名門」に「親しく其人格を渴仰し得た」手記である。中村達太郎は「洒脱快談、現場の事に至ては学究極めて深く、建築界比肩する者が無い」、伊東忠太は「沈思森厳、相ひ対して一種の圧迫感を感じる」、塚本靖は「装飾の造詣に至ては建築界独歩」の「俊英なる風姿」といった寸評が付されたほか、「在野の大家」の寄稿者として辰野や妻木ら 11 名が挙げられた。小西が建築界に馴染んでいった様子がうかがえる。

つづく「名家曰く集」をつづった「覆面記者」は、技師のひとりと思われる。「伊東博士曰く。記念号夫れは結構、御交際して何か書きませう」「武田五一氏曰く、大蔵省と京都の工芸学校の掛け持ちは忙しいよ。よし書きかけのを送らう」「妻木博士曰く、儲かるかね、何千刷る、成る程、結構々々、吾輩にも喋べれ？、喋るよ、来月一つ法螺を吹いてやらう」といった 14 名の取材後記がつづく。これらの記事からは、同誌の記者の存在が建築界に定着していった様相が認められる。

#### 表 1 1909 年 1 月号社告による「編集局記者」

(カッコ内は本稿の追記による執筆時の肩書と執筆期間)

金夫不二夫 (建築技師・金城不二夫の誤字か 1907.9-1911.3)
小松八翠 (土木技師 1908.12-1912.8)
新竹辰雄 (建築技師 1908.7-1916.7)
戸台邀月 (工学士 1907.7-1909.6、初出のみ「東京工科大学」)
國建樹 (建築技師 1908.8-1913.4)
小西可東 (肩書なし、1908.11-1910.11 頻出後、1915.1 と 1929.12 に寄稿。勝次郎名義で奥付の編集者 1907.7-1909.7)

#### 表 2 小西可東の主な著書

『バンカラ伍長：軍事小説』皆兵舎 1910
『続我まゝ曹長：戦場漫筆』皆兵舎 1910
『我まゝ曹長：戦場漫筆』皆兵舎 1910
『腕白新兵：軍事小説』皆兵舎 1911
『熊本籠城』春江堂 1911
『騎兵斥候露軍横断記：参謀本部附某参謀官実歴口演』
『薩摩義士録』 同文館 1912 (勝次郎名義)
西濃印刷岐阜出版部・須原屋書店 1915 (勝次郎を併記)
『巨人貞任：安倍氏一門之事蹟』
岩手日報社・須原屋書店 1918 (勝次郎を併記)
『播州特産金物發達史』工業界社 1928 (勝次郎名義)

#### 6. まとめ

商業誌『建築世界』は、2 年目以降に学界を挙げての支援が急速に展開されていた。編集局の批評精神も数年で形成され、新様式の創造に向けて新材料や批評への着目が訴えられていった。こうした誌面の充実化を担ったのは、建築技師と専門外のジャーナリストの共同による編集体制であった。

全体では建築実務に即した記事が多いなかで、巻頭の「主張」欄で醸成されていった同誌の批評精神は、建築と社会の関係性が意識され、社会派ともいえる性格を有していた。それは、建築技師と一般のジャーナリストの共同と、学界の友好的な支援のもとに築かれたことが認められる。つまり、従来のモダニズムの先鋭性を重視する建築誌研究とは異なる広い視野での建築批評が、1910 年代に観察できることを示している。

#### 注

- 1) 宮内嘉久「近代日本の建築イデオロギー」東京大学卒業論文、1949 (『少数派建築論』、p.258、井上書院、1974)
- 2) 河東義之「文献『建築世界』」、都市住宅、1974 年 7 月号、p.54
- 3) 村松貞次郎『日本建築家山脈』、p.228、鹿島研究所出版会、1965
- 4) 前掲 2) 河東 (1974)
- 5) 駒杵勤治『和洋住宅建築学』(越本長三郎編、須原屋書店、上 1906.9、下 1907.4) ならば、『建築世界』創刊準備の短さを示すことになる。